

## 話 題

### The American Fisheries Society の 第 138 回年次大会出席報告

岡本純一郎

日本水産学会国際交流委員会委員  
北海道大学大学院水産科学研究院

国際交流委員会の代表として去る 8 月 17 日から 21 日まで日本水産学会（以下「学会」）を代表する形でカナダの首都オタワで開催されたアメリカ水産学会（American Fisheries Society, 以下「AFS」）の第 138 回年次大会（8 月 17 日～21 日）に出席した。限られた滞在の中での極めて個人的な視野と理解に基づくものとお断りした上で道中報告も含めて AFS 大会出席の報告をさせていただきます。

#### 1. 準 備

この度の AFS 年次大会への出席は個人的日程の都合もあり、また、主目的が 8 月 19 日に予定されていた AFS 総会（AFS Business Meeting）へ日本水産学会を代表して参加することとしていたため滞在が 8 月 18 日から 20 日の 3 日間という日程で準備した。航空券の手配は、夏休みのピーク時で航空賃のハイシーズンでもあり適当な航空券の確保に苦労したが、7 月中旬に成田～米国ワシントン DC～オタワ、オタワ～トロント～成田という変則的な経路を確保し、その旅程を AFS に連絡した。一通りの手配を終えたと思っていたところ 8 月 7 日に AFS より海外招待諸学会からの出席者に対して 8 月 16 日の AFS 理事会（AFS Governing Board Meeting）への招待とその場における 5 分程度のスピーチ要請が寄せられた。しかし、旅程を固めてしまっていたため丁重にお断りせざるを得ない状況となり、出発前から何か歯車が噛み合っていない懸念を感じた。

#### 2. 出 発

8 月 17 日、12 時間半の飛行の後、漸く米国ワシントン DC に到着したが、外国線の乗り継ぎも一度米国への入国手続きを済ませる必要があり乗り継ぎ乗客専用の入国管理カウンターに運ばれ、税関審査も受けることになった。更に、後で、この米国入国審査で発行された出国カード返却のため帰国時トロントで航空機乗り継ぎが危うくなる事態に遭遇することになった。通常はこの出国カードは、カナダの入国管理係官に提出し、回収されるようだが、何も言わないとそのままパスポートに貼付さ

れたままカナダに入ってしまう。この出国カードが返却されないと記録上はそのまま米国に滞在していることとなり、また、将来、米国に入国する際には面倒なことになるようである。今回も帰国時にトロント空港で国内線から国際線への直接乗り継ぎのためのチェックインカウンターにおいてカナダの係官から将来米国に行かないのなら問題ないが、もし行くのであればトロント空港に駐在する米国入管職員に返却した方が良くと指摘された。このため一度、セキュリティ区域を出て乗り継ぎ時間を気にしつつ米国向けの搭乗区域にいる米国入管職員を探す羽目になった。米国の空港経由トランジットで他国に向かわれる方は注意された方が宜しいかと思います。ワシントン DC からカナダ行きの UA 便への乗り継ぎも平穩でなく、オーバースタッキングで搭乗 5 分前まで座席が割り当てられず、やきもき這這の体でオタワに到着することになった。オタワ空港では AFS が手配してくれた親切なピックアップサービスにより Westin ホテルに向かった。

#### 3. AFS 年次大会

1) 8 月 17 日夕刻、ホテルでチェックインを終え、ホテル隣接の会議場（Congress Center）のトレードショー・ホールで会議出席登録を行い、資料を受け取った。資料は冊子となったプログラムの他にアブストラクトなどを USB メモリー（1 GB）に収容したものが配布（写真 1）された。ネーム・タグは通常の AFS 会員参加者に加えて外国関係者、発表者、初めての参加者、トレードショー展示者、ホストなどについて様々な色表示のシールで表示されているが、感心したのは初めての参加者の表示シールである。多分、気を遣ってあげなさい

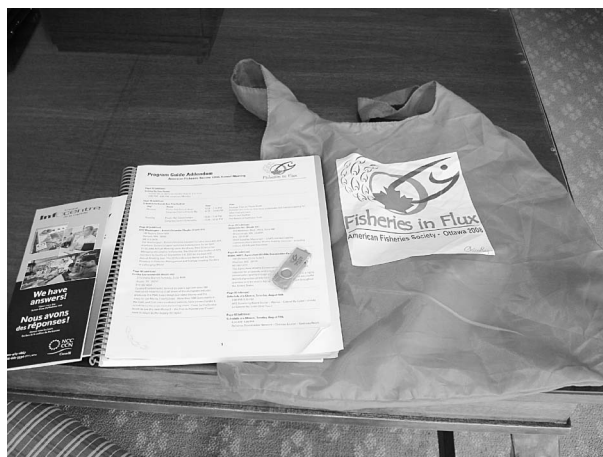


写真 1



写真 2



写真 4



写真 3

と言う事なのだろうか。また、AFS 大会と併せて開催されたトレードショー（写真2）ではゲーム・フィッシング関係企業などが数多く参加しており、AFS もトレードショー・コーナーにおいて AFS 書籍の販売コーナーを設けて積極的な営業をしていた。AFS オタワ大会の主会場は Westin ホテル、同ホテルに隣接する会議場（Congress Center）および Chateau Laurier ホテルの3会場となっていた。登録後、日程表を参考に Fisheries Management Section という会合を傍聴しようと Westin ホテルと道を隔てたお城のような Chateau Laurier ホテル（写真3）に向かい、会議場の隅に席を取ったが、議論の内容は共同体による漁業管理（Community-based Management）であった。既知のことと思いますが、AFS の下部組織は、4 管区（Divisions）、州単位で 47 支部（Chapters）、魚病や漁業法などを専門にする 22 部会（Sections）で構成され、管区と支部は地理的区分により、部会はテーマごとに地区を越えて組織さ

れ、また、支部の下に大学を単位とした団体（Units）や学生団体（Student sub-units）が組織されていることを事前に AFS について全く勉強もせず出発したため、恥ずかしながら始めて知った次第である。

2) 8月18日は朝8時から Westin ホテルのボール・ルームで AFS 年次大会の開会式と全体会合に出席した。会議場の大スクリーンには今回大会のスポンサーとして 65 団体が 500 ドルから 15,000 ドルの寄付者として顕彰されており、15,000 ドルのスポンサーにはカナダ漁業海洋省、オンタリオ州天然資源省（環境省は 10,000 ドル）、オタワ市、米国海洋大気庁（NOAA）などの政府系機関に加え民間団体、私企業など 7 団体が含まれていた。貧乏根性の故、計算してみると総額 247,500 ドルの外部支援があることが分かった。このような潤沢な予算のためかコヒーブレイクなどは全てスナック付きでホテルからサービスされ、国際会議並の豪華な大会であった。開会式（推定約 400 人弱出席、写真4）では、オタワ大会委員長である Dr. Marald より多数の参加者を迎えて大会を開催できることを喜びとする旨の開会の挨拶の後、オンタリオ州天然資源省大臣 Cansfield 女史より、「AFS 138 年の歴史の中でオタワでの AFS 年次大会の開催は 7 回目であり、今回、トレードショーを始め教育的、学術的会合がオタワで開催されることを歓迎する。「オ」州はカナダ淡水魚生産の 25% を占め、水産資源は漁業ばかりでなく旅行業、レクリエーションにとっても重要なものである。また、25 万に及ぶ湖水があり、140 万人の釣り人を有し、魚類は「オ」州の生物多様性においても重要な位置を占めている。将来の持続的な漁業のため科学的知見に基づき各水系の魚類資源の保存に努めており、その活動の諮問委員会には一般の人々に参加してもらっている。「オ」州はカナダ政府とともに現在二つの責務に取り組んでいる。それらは魚類資源の監視、保存、管理と気候温暖化による環境

悪化への対応、修復であり、今回の会議に参加した多くの研究者たちと経験を共有し、その知恵を学び、活用していきたい。」と挨拶があった。次いでカナダ海洋漁業省副大臣 d'Auray 女史が挨拶に立ち、水産資源の保存は3つの海に面し、大きな淡水系を有するカナダばかりでなく世界にとっても重要な課題であり、カナダ政府はこれまでも科学的知見を踏まえた水産資源保存・管理に対する取り組みを行ってきた。この会議において生態系の保全、水産資源の保存に対してカナダ政府関係者が貢献することを期待するとした。更に引き続き AFS 会長 Dr. Fabrizio 女史が、水産資源管理、生態系アプローチにおいて生物学などの自然科学のみならず社会・経済学、政策学などの人間行動に関する学問的取組の重要性を指摘し、全体会合で予定されている3名の基調講演者 (Dr. William Gilly, Dr. Jake Rice, Dr. Sally Guynn) を紹介した。Dr. Gilly (Stanford 大学) の基調講演 (本人欠席のため代わりに WCFS 副会長 Dr. Knuth 女史が行う。) は、1940 年に行われた Cortez 号によるカリフォルニア湾の調査と比較した現在の生物及び環境の変遷に関するものであり、Dr. Rice (カナダ海洋漁業省) の講演は、これまでのカナダ政府の水産資源管理における経験を踏まえ、生態系の保全や資源回復のために漁獲を減らすように求める科学的アドバイス (短期的な犠牲があっても長期的な資源の増大によって報われる) が往々にして目の前の犠牲を避けようとする政策責任者から受け入れられない現状を指摘し、大事なのは政策決定者に短期的視野を取らせる社会経済的インセンティブに科学的アドバイスが適切に対応することであると、科学者がエリート意識を捨て、科学者間の意思疎通の改善、透明性の高い基準を伴った意思決定手続き、生態学などの自然科学と社会科学との連携などが必要であると述べた。最後の講演者である Dr. Guynn 女史 (Association of Fish and Wildlife Agency) は、将来の持続的な漁業を達成するためには、その活動を指導する指導者の人間的側面が大事であり、その指導者としての必要な資質形成について講演した。これら各基調講演の合間に様々な AFS 賞の授与式が行われた。

全体会合の終了後、会場で忙しく関係者と懇談中の AFS 会長 Dr. Fabrizio 女史を捕まえ、学会に対する AFS 大会への招待に対する謝意を伝えたところ、Fabrizio 会長は日本水産学会から参加していただき感謝する、8月16日の理事会 (Governing Board Meeting) に出席してもらえなかったことは残念であったとの言葉があった。その後、8月19日に多忙を極める AFS 事務局長 Dr. Gus Rassam 氏と面会し、次期会長、大会委員長に対する日本水産学会からのお土産を託し、招待を頂きながら日程の都合で8月16日の理事会に出席できなかった点を詫言ったところ、Rassam 事務局長は21日昼

に予定している World Council of Fisheries Societies の昼食会で WFC2008 について報告してもらえれば有難いのだが、8月21日帰国日程から見て無理なようで残念であるとしたので、私の方から昼食会には出席できないがメッセージを配ってもらえないかとして、大会事務局を通じて Rassam 氏に挨拶文 (その中に WFC2008 準備状況について言及) を渡すこととした。

3) 8月19日の AFS 総会 (Business Meeting) では、出席会員に Fabrizio 会長から日本水産学会を始め外国招待諸学会など (英国、メキシコ、パキスタン、世界チョウザメ保護協会) の紹介が行われたが、私と他一団体しかその場に出席しておらず、紹介者を戸惑わせたようである。一方、一般会員の表情には、日本からわざわざ出席しているのかと驚いたような反応が見られたことは逆に意外であった。総会では、事務局より2007年の会計報告 (私の正確さを欠くメモによれば、収入が370万ドルでその多くが出版収入、支出が330万ドル、資産は420万ドルと健全である旨報告された) とともに学生会員が25%増えた旨報告された。また、規則委員会から規則改正案 (電子表決の導入、諸決議の際の手続き変更、AFS 学生団体が他の団体に加盟する場合には、その加盟先団体の会長又は副会長が AFS 会員であることを条件とするなど) が提案され、承認された。また、AFS として開催地 (オタワ) に対する感謝決議とともに水産資源の保存に向けた取り組みの必要を訴え、AFS の責務が高まっているとして関係諸機関に対する AFS への協力要請を含めた大会決議を採択した。次いで2009年 AFS 大会開催地テネシー州の州都ナッシュビルが紹介された (大会の開催地は、2011年まで決定済みである)。その後、Fabrizio 会長自身が述べるごとく総会の中心イベントとして総会時間の殆どを費やして AFS への貢献、教育への貢献、水産科学を一般大衆に広しめた貢献 (ジャーナリストを対象)、50年会員表彰、支部表彰、優秀学生団体及び学生表彰などが行われた。最後に、執行部の交代が発表され、Dr. William Franzin が AFS 新会長に就任し、今後の方針として AFS および水産科学を取り巻く環境の多様性 (会員、研究分野、利害関係者など) に目を向け、資源保護、水産生物の生息域の悪化への対処などに取り組み、明らかな少数者 (Visible Minority) を対象とした賞も新たに導入したいとし、総会を終えた。

4) 口頭発表を伴うシンポジウムは常時同時並行的に17会場で開催され、全体会合、総会の合間に個人的な関心から幾つかのシンポジウムに出席した。Fisheries Governance セッションでは、傍聴した限りでは自己の研究発表というよりは Governance とは何か、漁業管理問題に対する自己の分析や見解の発表が行われている感じであった。カナダの BC 大学の研究者の漁業管

理における経済学で言う減価についての発表では、1975年のClark & Munroの研究を基に資源管理の様々な態様（トップダウン方式、自己管理方式、共同管理方式）に関する減価分析調査をマレーシア、フィジーで行っている旨説明したが、会場からの漁業者および政府関係者の減価意識をどのようにして調査するのかとの質問に、心理学者の協力を得て具体的な数字を提起して意識調査のようなものを行っている旨の回答であった。また、タイのカセサート大学から旧知のKungwan博士が出席し、タイの漁業管理動向のような発表があり、会場から一般的にアジア諸国では歴史的に漁業の自己管理が行われてきたことが知られているが、タイについてはそのような記述が見られない。タイには住民参加型の管理事例が無かったのかとの質問に、10年前からEUなどのパイロット事業で導入が始まっているとの説明があった。カナダ政府関係者からは、カナダにおけるITQの導入など漁業管理の変遷、取組について説明があり、混獲問題や生息環境問題については未だ適切な回答が得られていないとした。また、Evolving Fish, Changing Fisheriesのセッションでは、その多くが漁獲による魚族資源の生活特性、生物特性が変化することについての関心やそれが逆に最適な漁業管理にどうフィードバックするのかなどに関心が強かったようである。また、日本からも東京農業大学から北海道のサロマ湖などのエビの選択漁獲がエビの成熟特性に与える影響調査などが発表され、ノルウェーの研究者から索餌回遊漁場を対象とした禁漁区の設定と抱卵・産卵群を対象とした禁漁区の設定が漁獲と資源保存にどのように異なった影響を与えるかというようなモデル研究の発表があった。

#### 4. 所 感

今回 AFS 大会において総会挨拶および基調講演、また、個人的関心という限られた範囲でのシンポジウムを通して感じたことは、9000人近くの会員を有する AFS が時代の要請なのか水産資源の保存、維持、持続的な利用、それらに携わる専門家（professional）の育成を明確な活動方針としているように感じられた。大会参加者の関心が純粋学問的な面ばかりでなく正に水産資源の利用（観光、レジャー、漁業、環境など）という人間との関係で資源保存、維持および環境保全などに関わる議論が多かったことである。このため標本採取の標準化、エコラベルなどの認証制度における政府と第三者機関の関係問題、外来種の導入管理の成功事例では小学校レベルからの実験・観察動物の扱いに関する教育成果などが報告されていた。更に、私の出席したセッションの特徴なのか、ノルウェーの関係者又はノルウェーの大学等との共同研究の発表、出席が多く、AFS 活動におけるノルウェーの存在感が感じられた。また、幾つかのシンポジウムでは、一連の発表が終わった後に意見交換時間（Discussion Time）を設けて、個別発表に限定した質疑ばかりでなくシンポジウム・テーマに関して一般的な議論をする枠組が設けられていたことも、AFS 大会の特徴のようである。最後に、今回の AFS 大会への出席に当たって日程の都合もあり国際交流委員会が期待されたような現地活動はできなかったが、私個人にとって非常に良い経験の機会を与えていただき、日本水産学会に感謝申し上げます。